

# 種山ヶ原

宮沢賢治

青空文庫



種山ヶ原たねやま はらといふのは北上山地きたかみのまん中の高原で、青黒いつるつるの蛇紋岩じゃもんがんや、硬い橄欖岩かんらんがんからできてゐます。

高原のへりから、四方に出たいくつかの谷の底には、ほんの五六軒づつの部落がありません。

春になると、北上の河谷かこくのあちこちから、沢山の馬が連れて来られて、此の部落の人たちに預けられます。そして、上の野原に放されます。それも八月の末には、みんなめいめいの持主に戻ってしまふのです。なぜなら、九月には、もう原の草が枯れはじめ水霜が下りるのです。

放牧される四月よつきの間も、半分ぐらゐるまでは原は霧や雲に鎖とじぎされます。実にこの高原の続きこそは、東の海の側からと、西の方からの風や湿気しつきのお定まりのぶつつかり場所でしたから、雲や雨や雷や霧は、いつでももうすぐ起つて来るのでした。それですから、北上川の岸からこの高原の方へ行く旅人は、高原に近づくに従つて、だんだんあちこちに雷神の碑を見るやうになります。その旅人と云つても、馬を扱ふ人の外ほかは、薬屋か林務官、化石を探す学生、測量師など、ほんの僅わづかなものでした。

今年も、もう空に、透き徹とほつた秋の粉が一面散り渡るやうになりました。

雲がちぎれ、風が吹き、夏の休みももう明日だけです。

達二は、明後日から、また自分で作った小さな草鞋わらぢをはいて、二つの谷を越えて、学校へ行くのです。

宿題もみんな済ましたし、蟹かにを捕ることも木炭すみを焼く遊びも、もうみんな厭あきてゐました。達二は、家の前の檜ひのきによりかかつて、考へました。

(あゝ。此の夏休み中で、一番面白かつたのは、おぢいさんと一緒に上の原へ仔馬を連れに行つたのと、もう一つはどうしても劍けん舞ばひだ。鶏の黒い尾を飾つた頭巾づきんをかぶり、あの昔からの赤い陣羽織を着た。それから硬い板を入れた袴はかまをはき、脚きゃはん絆はんや草鞋をきりつとむすんで、種山劍舞連と大きく書いた沢山の提ちやうちん灯ちんに囲まれて、みんなと町へ踊りに行つたのだ。ダー、ダー、ダースコ、ダー、ダー、ダー。踊つたぞ、踊つたぞ。町のまつ赤な門火の中で、刀をぎらぎらやらかしたんだ。櫛夫ならをさんと一緒になつた時などは、刀がほんたうにカチカチぶつつかつた位だ。

ホウ、そら、やれ、

むかし 達たつこく谷くの 悪路あくろ王わう、

まつくらあくらの二里の洞、

渡るは 夢と 黒夜神、

首は刻まれ 朱桶に埋もれ。

やったぞ。やったぞ。ダー、ダー、ダースコ、ダーダ、

青い 仮面この こけおどし、

太刀を 浴びては いっぱかぶ、

夜風の 底の 蜘蛛をどり、

胃袋う はいて ぎつたりぎたり。

ほう。まるで、……。)

「達二。居るが。達二。」達二のお母さんが家の中で呼びました。

「あん、居る。」達二は走って行きました。

「善い童だはんてな、おぢいさんと、兄など、上の原のすぐ上り口で、草刈ってるがら、

弁当持つて行つて来。な。それがら牛も連れてつて、草食あせで来。な。兄ながら離れな

よ。」

「あん、行て来る。行て来る。今草鞋穿ぐがら。」達二ははねあがりました。

お母さんは、曲げ物の二つの櫃と、達二の小さな弁当とをいくつか紙にくるんで、それ  
をみんな一緒に大きな布の風呂敷ふろしきに包み込みました。そして、達二が支度をして包みを背  
負つてゐる間に、おつかさんは牛をうまやから追ひ出しました。

「そだら行つて来ら。」と達二は牛を受け取つて云ひました。

「氣い付けで行げ。上で兄あながら離あれなよ。」

「あん。」達二は、垣根のそばから、楊やなぎの枝を一本折り、青い皮をくるくる剥はいで鞭むちを拵しら  
へ、静に牛を追ひながら、上の原への路みちをだんだんのぼつて行きました。

「ダーダー、スコ、ダーダー。」

夜の頭巾づきんは 鶏とりの黒尾、

月のあかりは……、

しっ、歩け、しっ。」

日がカンカン照つてゐました。それでもどこかその光に青い油の疲れたやうなものがあ  
りましたし、又、時々、冷たい風が紐ひものやうにどこからか流れては来ましたが、まだ仲々  
暑いのでした。牛が度々立ち止まるので、達二は少し苛いら々いらしました。

「上さ行つて好い草食へ。早く歩げつ。しっ。馬鹿ばかだな。しっ。」

けれども牛は、美しい草を見る度に、頭を下げ、舌をべらりと廻して喰べました。

(牛の肉の中で一番上等が此の舌だといふのは可笑しい。涎れで粘々してる。おまけに黒い斑々がある。歩け。こら。)

「歩げ。しつ。歩げ。」

空に少しばかりの、白い雲が出ました。そして、もう大分のぼつてみました。谷の部落がずっと下に見え、達二の家の木小屋の屋根が白く光つてゐます。

路が林の中に入り、達二はあの奇麗な泉まで来ました。まっ白の石灰岩から、ごぼごぼ冷たい水を噴き出すあの泉です。達二は汗を拭いて、しゃがんで何べんも水を掬つてのみました。

牛は泉を飲まないで、却つて苔の中のたまり水を、ピチャピチャ嘗めました。

達二が牛と、又あるきはじめたとき、泉が何かを知らせる様に、ぐうっと鳴り、牛も低くうなりました。

「雨になるかも知れないな。」と達二は空を見て眩きました。

林の裾の灌木の間を行ったり、岩片の小さく崩れる所を何べんも通つたりして、達二はもう原の入口に近くなりました。

光つたり陰つたり、幾重にも疊む丘丘の向ふに、北上の野原が夢のやうに碧くまばゆく湛へてゐます。河が、春日大明神の帯のやうに、きらきら銀色に輝いて流れました。

そして達二は、牛と、原の入口に着きました。大きな櫛の木の下に、兄さんの縄で編んだ袋が投げ出され、沢山の草たばがあちこちにころがってゐました。

二匹の馬は、達二を見て、鼻をふるふる鳴りました。

「兄な。居るが。兄な。来たぞ。」達二は汗を拭ひながら叫びました。

「おゝい。あゝい。其処に居ろ。今行くぞ。」

ずうつと向ふの窪みで、達二の兄さんの声がしました。牛は沢山の草を見ても、格別嬉しきやうにもしませんでした。

陽がぱつと明るくなり、兄さんがそつちの草の中から笑つて出て来ました。

「善ぐ来たな。牛も連れで来たのが。弁当持つてが。善ぐ来た。今日あ午まがらきつと曇る。俺も少し草集めて仕舞がらな、此処らに居ろ。おぢいさん、今来る。」

兄さんは向ふへ行かうとして、振り向いて又云ひました。

「腹減つたら、弁当、先に喰べてろ。風呂敷ば、あの馬さ結付けで置げ。午まになつたら又来るがら。」



「うん。此処に居る。」

そして達二の兄さんは、行つてしまひました。空にはうすい雲がすっかりかゝり、太陽は白い鏡のやうになつて、雲と反対に馳せました。風が出て来て刈られない草は一面に波を立てます。

どうしたのか、牛が俄かに北の方へ馳せ出しました。達二はびっくりして、一生懸命追ひかけながら、兄の方に振り向いて叫びました。

「牛あ逃げる。牛あ逃げる。兄な。牛あ逃げる。」

せいの高い草を分けて、どんどん牛が走りました。達二はどこ迄も夢中で追ひかけました。そのうちに、足が何だか硬張つて来て、自分で走つてゐるのかどうか判らなくなつてしまひました。それからまはりがまつ蒼になつて、ぐるぐる廻り、たうとう達二は、深い草の中に倒れてしまひました。牛の白い斑が終りにちらつと見えました。

達二は、仰向けになつて空を見ました。空がまつ白に光つて、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄い鼠色の雲が、速く速く走つてゐます。そしてカンカン鳴つてゐます。

達二はやつと起き上つて、せかせか息しながら、牛の行つた方に歩き出しました。草の中には、牛が通つた痕らしく、かすかな路のやうなものがありました。達二は笑ひました。

そして、

（ふん。なあに、何処か<sup>どこ</sup>で、のっこり立つてるさ。）と思ひました。

そこで達二は、一生懸命それを跡<sup>つ</sup>けて行きました。ところがその路のやうなものは、まだ百歩も行かないうちに、をとこへしや、すてきに背高の薊<sup>あざみ</sup>の中で、二つにも三つにも分れてしまつて、どれがどれやら一向わからなくなつてしまひました。達二は思ひ切つて、そのまん中のを進みました。けれどもそれも、時々断<sup>き</sup>れたり、牛の歩かないやうな急な所を横<sup>よこ</sup>様に過<sup>へ</sup>ぎたりするのです。それでも達二は、

（なあに、向ふの方の草の中で、牛はこつち向いて、だまつて立つてるさ。）と思ひながら、ずんずん進んで行きました。

空はたいへん暗く重くなり、まはりがぼうつと霞<sup>かす</sup>んで来ました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が、切れ切れになつて眼<sup>め</sup>の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

（あゝ、こいつは悪くなつて来た。みんな悪いことはこれから集<sup>たか</sup>つてやつて来るのだ。）と達二は思ひました。全くその通り、俄<sup>にはか</sup>に牛の通つた痕は、草の中で無くなつてしまひました。

（あゝ、悪くなつた、悪くなつた。）達二は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ云ったり、さらさら鳴ったりしました。霧が殊しげに滋しくなつて、着物はすつかりしめつてしまひました。

達二は咽喉のど一杯叫びました。

「兄あな。兄あな。牛あ逃げだ。兄あな。兄あな。」

何の返事も聞えません。黒板から降る白墨の粉のやうな、暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまはり、あたりが俄にシインとして、陰気に陰気になりました。草からは、もうしづく雫の音がポタリポタリと聞えて来ます。

達二は早く、おぢいさんの所へ戻らうとして急いで引つ返しました。けれどもどうも、それは前に来た所とは違つてゐたやうでした。第一、薊あざみがあんまり沢山ありましたし、それに草の底にさつき無かつた岩かけが、度々ころがつてゐました。そしてたうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり眼の前に現はれました。すゝきが、ざわざわざわつと鳴り、向ふの方は底知れずの谷のやうに、霧の中に消えてゐるではありませんか。

風が来ると、芒すすきの穂は細い沢山の手を一ぱいのぼして、忙せはしく振つて、

「あ、西さん、あ、東さん。あ西さん。あ南さん。あ、西さん。」なんて云つてゐる様でした。

達二はあんまり見つともなかつたので、目を瞑つぶつて横を向きました。そして急いで引つ返しました。小さな黒い道が、いきなり草の中に出て来ました。それは沢山の馬の蹄ひづめの痕で出来上つてゐたのです。達二は、夢中で、短い笑ひ声をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはゞが五寸ぐらゐになつたり、又三尺ぐらゐに變つたり、おまけに何だかぐるつと廻つてゐるやうに思はれました。そして、たうとう、大きinateつぺんの焼けた栗くりの木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも岐わかれてしまひました。

其処そこは多分は、野馬の集まり場所であつたでせう、霧の中に円い広場のやうに見えたのです。

達二はがつかりして、黒い道を又戻りはじめました。知らない草穂くさほが静かにゆらぎ、少し強い風が来る時は、どこかで何かが合図をしてでも居るやうに、一面の草が、それ来たつとみなからだを伏せて避けました。

空が光つてキーンキーンと鳴つてゐます。それからすぐ眼の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらはれました。達二はしばらく自分の眼を疑つて立ちどまつてゐましたが、やはりどうしても家らしかつたので、こはごはもつと近寄つて見ますと、それは冷た

い大きな黒い岩でした。

空がくるくるくるつと白く揺らぎ、草がバラツと一度に雫を払ひました。

(間違つて原を向ふ側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ)と達二は、半分思ふ様に半分つぶやくやうにしました。それから叫びました。

「兄な、兄な、居るが。兄な。」

又明るくなりました。草がみな一斉に悦びの息をします。

「伊佐戸の町の、電気工夫の童あ、山男に手足い縛らへてたふうだ。」といつか誰かの話した語が、はつきり耳に聞えて来ます。

そして、黒い路が、俄に消えてしまひました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて来ました。

空が旗のやうにぱたぱた光つて翻へり、火花がパチパチパチツと燃えました。

達二はいつか、草に倒れてゐました。

そんなことはみんなぼんやりしたもやの中の出来事のやうでした。牛が逃げたなんて、やはり夢だかなんだかわかりませんでした。風だつて一体吹いてゐたのでせうか。

達二はみんなと一緒に、たそがれの県道を歩いてゐたのです。

橙だいだい色の月が、来た方の山からしづかに登りました。伊佐戸の町で燃す火が、赤くゆらいでゐます。

「さあ、みんな支度はいゝが。」誰かが叫びました。

達二はすつかり太い白いたすきを掛けてしまつて、地面をどんどん踏みました。櫓夫ならをさんが空に向つて叫んだのでした。

「ダー、ダー、ダー、ダー、ダー、ダー、スゴダーダー。」それから、大人が太鼓を撃ちました。

達二は刀を抜いてはね上りました。

「ダー、ダー、ダー、ダー、ダー、スゴ、ダーダー。」

「危ない。誰だ、刀抜いだのは。まだ町さも来ないに早あぢや。」怪物の青仮面あをめんをかぶつた清介せいすけが威張つて叫んでゐます。赤い提灯ちやうちんが沢山点とちもされ、達二の兄さんが提灯を持つて来て達二と並んで歩きました。兄さんの足が、寒天のやうで、夢のやうな色で、無暗むやみに長いのでした。

「ダー、ダー、ダー、ダー、ダー。スゴ、ダーダー。」

町はづれの町長のうちでは、まだ門火を燃して居ませんでした。その水松樹いちぢみの垣に囲まれた、暗い庭さきにみんな這入はひつて行きました。

小さな奇麗な子供らが出て来て、笑って見ました。いよいよ大人が本気にやり出したのです。

「ホウ、そら、遣れ。ダー、ダー、ダー、ダー、ダー。ダー、スコ、ダーダー。」「ドドーンドドーン。」

「夜風さかまき ひのきはみだれ、

月は射そぐ 銀の矢なみ、

打うつも果てるも 一つのいのち、

太刀たちの軋きしりの 消えぬひま。ホツ、ホ、ホツ、ホウ。」

刀が青くぎらぎら光りました。梨なしの木の葉が月光にせはしく動いてゐます。

「ダー、ダー、スコ、ダーダー、ド、ドーン、ド、ドーン。太刀はいなづま すゝきのさやぎ、燃えて……」

組は二つに分れ、剣がカチカチ云ひます。青仮面あをめんが出て来て、潮いづぶかつぶ死するする時のやうな格好かくかうで一生懸命跳ね廻ります。子供らが泣き出しました。達二は笑ひました。

月にはが俄かに意地悪い片眼になりました。それから銀さかつぎの盃さかつぎのやうに白くなって、消えてしまひました。

（先生の声がする。さうだ。もう学校が始まってあるのだ。）と達二は思ひました。

そこは教室でした。先生が何だか少し瘠やせたやうです。

「みなさん。楽しい夏の休みももう過ぎました。これからは気持ちのいゝ秋です。一年中、一番、勉強にいゝ時です。みなさんはあしたから、又すっかり勉強をするのです。どなたも宿題はして来たでせうね。今日持つて来た方は手をあげて。」

達二と櫛夫なつをさんと、たつた二人でした。

「明日は忘れないでみなさん持つて来るのですよ。もし、ぜんたい、してしまはなかつた人があつても、やはりその儘まま、持つて来るのです。すっかりしてしまはなかつた人は手をあげて。」

誰も上げません。

「さうです。皆さんは立派な生徒です。休み中、みなさんは何をしましたか。そのうちで一番面白かつたことは何ですか。達二さん。」

「おぢいさんと仔馬を集めに行つたときです。」

「よろしい。大へん結構です。櫛夫さん。あなたはお休みの間に、何が一番楽しかつたのですか。」



「劍舞けんばひです。」

「劍舞をあなたは踊ったのですか。」

「さうです。」

「どこですか。」

「伊佐戸いさどやあちこちです。」

「さうですか。まあよろしい。お座りなさい。みなさん。外にも劍舞に出た人はありますか。」

「先生、私も出ました。」

「先生、私も出ました。」

「達二さんも、さうですか。よろしい。みなさん。劍舞は決して悪いことではありません。けれども、勿論もちろんみなさんの中にそんな方はないでせうが、それでお銭あしを貰もらったりしてはなりません。みなさんは、立派な生徒ですから。」

「先生。私はお銭を貰ひません。」

「よろしい。さうです。それから……。」

達二は、眼を開きました。みんな夢でした。冷たい霧や雫しずくが額に落ちました。空は霧で

一杯で、なんにも見えません。俄かに明るくなったり暗くなったりします。一本のつりがねさうが、身体を屈めて、達二をいたはりました。

そして達二は又うとうとしました。そこで霧が生温い湯のやうになったのです。可愛い女の子が達二を呼びました。

「おいでなさい。いゝものをあげませう。そら。干した苹果ですよ。」

「ありがど、あなたはどなた。」

「わたし誰でもないわ。一緒に向ふへ行つて遊びませう。あなた驢馬を有つてゐて。」

「驢馬は持つてません。只の仔馬ならあります。」

「只の仔馬は大きくて駄目だわ。」

「そんなら、あなたは小鳥は嫌ひですか。」

「小鳥。わたし大好きよ。」

「あげませう。私はひはを有つてゐます。ひはを一疋あげませうか。」

「えゝ。欲しいわ。」

「あげませう。私今持つて来ます。」

「えゝ、早くよ。」

達二は、一生懸命、うちへ走りしました。美しい緑色の野原や、小さな流れを、一心に走りしました。野原は何だかもくもくして、ゴムのやうでした。

達二のうちは、いつか野原のまん中に建つてゐます。急いで籠かごを開けて、小鳥を、そつとつかみました。そして引つ返さうとしましたら、

「達二、どこさ行く。」と達二のおつかさんが云ひました。

「すぐ来るから。」と云ひながら達二は鳥を見ましたら、鳥はいつか、萌黄色もえぎの生菓子に變つてゐました。やつぱり夢でした。

風が吹き、空が暗くて銀色です。

「伊佐戸いさどの町の電気工夫のむすこあ、ふら、ふら、ふら、ふら、ふら、ふら、」とどこかで云つてゐます。

それからしばらく空がミンミンと鳴りました。達二は又うとうとしました。

山男が櫛ならの木のうしろからまつ赤な顔を一寸ちよつと出しました。

(なに怖いことがあるもんか。)

「こりや、山男。出はつて来こ。切つてしまふぞ。」達二は脇差わきざしを抜いて身構へしました。山男がすっかり怖がつて、草の上を四つん這よひになつてやつて来ます。髪が風にさらさ

ら鳴ります。

「どうか御免御免。何じよなことでも為んす。」

「うん。そんだったら許してやる。蟹を百足捕つて来。」

「ふう。蟹を百足。それ丈けでようがすかな。」

「それがら兎を百足捕つて来。」

「ふう。殺して来てもようがすか。」

「うんにや。わがんない。生ぎだのだ。」

「ふうふう。かしこまた。」

油断をしてゐるうちに、達二はいきなり山男に足を捉まれて倒されました。山男は達二を組み敷いて、刀を取り上げてしまひました。

「小僧。さあ、来。これから俺れの家来だ。来う。この刀はいゝ刀だな。実に焼きをよくかげである。」

「ばか。奴の家来になど、ならない。殺さば殺せ。」

「仲々づ太いやづだ。来つたら来う。」

「行がない。」

「ようし、そんだったらさらって行く。」

山男は達二を小脇こわきにかゝへました。達二は、素早く刀を取り返して、山男の横腹をズブリと刺しました。山男はばたばた跳ね廻って、白い泡を沢山吐いて、死んでしまひました。急にまつ暗になつて、雷はげが烈しく鳴り出しました。

そして達二は又眼を開きました。

灰色の霧が速く速く飛んでゐます。そして、牛が、すぐ眼の前に、のっそりと立つてゐたのです。その眼めは達二を怖おそれて、横の方を向いてゐました。達二は叫びました。

「あ、居だが。馬鹿うなだな。奴おそは。さ、歩あべ。」

雷と風の音との中から、微かすかに兄さんの声が聞えました。

「おゝい。達二。居るが。達二。達二。」

達二はよろこんでとびあがりました。

「おゝい。居る、居る。兄あなあ。おゝい。」

達二は、牛の手綱をその首から解いて、引きはじめました。

黒い路が又ひよつくり草の中にあらはれました。そして達二の兄さんが、とつぜん、眼の前に立ちました。達二はしがみ付きました。

「探したぞ。こんな処まで来て。何して黙って彼処に居ないがった。おぢいさん、うんと心配してるぞ。さ、早く歩べ。」

「牛あ逃げだだも。」

「牛あ逃げだ。はあ、さうが。何にびつくりしたたがな。すっかりぬれだな。さあ、俺のけら着ろ。」

「一向寒くない。兄なのは大きくて引き擦るがらわがんだ。」

「さうが。よしよし。まづ歩べ。おぢいさん、火たいで待ってるがらな。」

緩い傾斜を、二つ程昇り降りしました。それから、黒い大きな路について、暫らく歩きました。

稲光が二度ばかり、かすかに白くひらめきました。草を焼く匂がして、霧の中を煙がほつと流れてゐます。

達二の兄さんが叫びました。

「おぢいさん。居だ、居だ。達二あ居だ。」

おぢいさんは霧の中に立ってゐて、

「あゝさうが。心配した、心配した。あゝ好がった。おゝ達二。寒がべあ、さあ入れ。」

と云ひました。

半分に焼けた大きな栗の木の根もとに、草で作った小さな囲ひがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えてゐました。

兄さんは牛を櫓なぐらの木につなぎました。

馬もひひんと鳴いてゐます。

「おゝむぞやな。な。何ほが泣いだがな。さあさあ団子たべろ。食べる。な。今こつちを焼ぐがらな。全体何処迄行つてだつた。」

「笹ささ長根ながねの下り口だ。」と兄が答へました。

「危いがつた。危いがつた。向ふさ降りだらそれつ切りだつたぞ。さあ達二。団子喰べろ。ふん。まるつきり馬こみだいに食つてる。さあさあ、こいづも喰べろ。」

「おぢいさん。今のうちに草片附げで来るべが。」と達二の兄さんが云ひました。

「うんにや。も少し待で。又すぐ晴れる。おらも弁当食ふべ。あゝ心配した。俺おらも虎とらこ山の下まで行つて見で来た。はあ、まんつ好えがたつた。雨も晴れる。」

「今朝ほんとに天気好えがたつたのにな。」

「うん。又好ゆくなるさ。あ、雨漏つて来た。草少し屋根さかぶせろ。」

兄さんが出て行きました。天井がガサガサガサ云ひます。おちいさんが、笑ひながらそれを見上げました。

兄さんが又はひつて来ました。

「おちいさん。明るくなつた。雨あ霽れだ。」

「うんうん。さうが。さあ弁当食つてで草片附げべ。達二。弁当食べる。」

霧がふつと切れました。陽の光がさつと流れて入りました。その太陽は、少し西の方に寄つてかかり、幾片かの蠟ろうふのやうな霧が、逃げおかれて仕方なしに光りました。

草からは雫しづくがきらきら落ち、総すべての葉も茎も花も、今年の終りの陽の光を吸つてゐます。はるかあをの北上の碧い野原は、今泣きやんだやうにまぶしく笑ひ、向ふの栗の木は、青い後光を放ちました。



# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八巻」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年11月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 種山ヶ原

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>